

那珂君休遺跡群 VI

——第5次調査報告——



1997
福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸との交流が盛んで多くの文化遺産を私達に伝えています。とくに初期水田跡、環濠集落跡の板付遺跡は著名で国の史跡指定にもなっています。アジアの交流拠点都市を目指してより良い都市形成が成なされようとしていますが、都市開発は文化財と調和を保ちながら進めいかなくてはなりません。

今回調査を行いました那珂君体遺跡は板付遺跡の東北に隣接する位置にある古墳時代の水田跡です。当時の水田形態を明瞭に留め、良好な状態で調査することが出来ました。

最後になりましたが調査費を御負担頂いた宗登美子、井手茂子、吉村照代、施工の中村建設様には発掘調査、整理に際しまして、ご理解とご協力を得まして報告書を刊行することが出来ました。ここに感謝の意を表すると共に、本書が文化財保護や普及、教育などに活用して頂ければ幸いです。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に伴って調査を実施した那珂君体遺跡第5次調査の調査報告である。
2. 発掘調査は宗登美子、井手茂子、吉村照代各氏の委託を受け、福岡市教育委員会が平成8年2月27日～3月27日まで実施した。
3. 本書に使用した遺構実測図の作成は松村が行い、遺物の実測及び製図は濱石正子、撫養久美子が行った。また本書で使用する方位は磁北を用いている。
4. 本書の編集及び執筆は松村が行った。
5. 本書に関する記録類及び出土遺物は平成8年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵予定である。
6. 本調査に関するデータは以下のとおりである。遺跡略号 NKR-5. 調査期間 平成8年2月27日～3月27日. 所在地 福岡市博多区那珂4丁目310. 調査番号9557。

本文目次

I. 序 説	
1. はじめに	1
2. 調査の組織	1
3. 遺跡の位置と立地	1
II. 調査の記録	
1. 調査の概要	5
2. 土壙	6
3. 水田の調査	8
4. 出土遺物	11

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/25,000)	2
Fig. 2 調査区位概図(1/8,000)	3
Fig. 3 土層実測図(1/80)	7
Fig. 4 調査区全体図(1/200)	8
Fig. 5 畦畔断面実測図(1/10)	9
Fig. 6 出土遺物実測図(1/3)	11

写真目次

Photo. 1 2次調査	3
Photo. 2 3次調査	3
Photo. 3 4次調査	3
Photo. 4 6次調査	3
Photo. 5 調査区遠景	5
Photo. 6 土層写真(南側)	6
Photo. 7 土層写真(西側)	6
Photo. 8 水田全景(北側)	6
Photo. 9 水田全景(南側)	10
Photo. 10 水田(北東隅)	10
Photo. 11 足跡	10
Photo. 12 水口(水田3)	10
Photo. 13 畦畔(水田3東側)	10
Photo. 14 出土土器	10

I. 序説

1.はじめに

平成7年8月4日、宗登美子氏より福岡市博多区那珂4丁目310の埋蔵文化財事前審査願が提出され、同8月29日に試掘調査を実施した。申請地は那珂君体遺跡群内に位置し、第3次調査の南西に隣接し、さらにその周辺部も数次にわたる調査が実施され洪水砂に覆われた水田跡が検出されていることからその種の遺跡との予想がなされていた。試掘の結果は予想通りで二面の水田面を検出した。申請物件は売買であること、さらにその後に分譲マンションを建設するとの事で協議の結果調査・整理費を宗登美子氏ユニットハウス等を中村建設㈱で負担して頂くこととなり2月後半から発掘調査に着手することで合意に達した。

発掘調査は平成8年2月27日から同3月27日まで実施し、整理・報告を平成8年度に行った。

2. 調査の組織

調査関係者は下記の通りである。

調査委託 宗登美子 井手茂子 吉村照代

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田 英俊 尾花 剛(前任)

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

埋蔵文化財課第二係長 山口兼治

調査庶務 埋蔵文化財課第一係 西田由香

調査担当 主任文化財主事 松村道博

試掘調査 主任文化財主事 山崎龍男 埋蔵文化財課第二係 池田祐司

調査・整理作業 渡石正子 抚養久美子 牟田恵子 飯田千恵子 前原真理 広他熊雄 蒲池雅則

安高清一 山口守人 富永利幸 渡辺純夫 水川カツエ 内山和子 奥田弘子 本多

ナツ子 平田百合子 野口リュウ子 高手与志子 兼田ミヤ子

3. 遺跡の位置と立地

那珂君体遺跡は諸岡川と御笠川に挟まれた冲積地の低位面に位置し標高7m前後を測る。諸岡川は牛頭山地の北方に連なる山崎台地を解析して北流し、その周囲には谷底平野が形成されている。一方御笠川は二日市地溝帯に沿って北西流し地溝低地としての様相を呈する。広い扇状地平野を形成するが旧河道が多く散在する加湿地を生み出している。今回の調査地点は御笠川の左岸に隣接し、その影響を直接受ける所にある。

周辺地域はこれまで多くの調査(別表)がなされている。古くは日本考古学協会による板付台地の調査、その後、板付台地に伴う水田跡の調査、更には諸岡台地をも含む周辺部の調査へと展開している。那珂君体遺跡群はこれまで7次にわたり調査が行われ、主に古墳時代前期の水田跡を中心と下生産遺跡として認知されている。さらに北西1.5kmには那珂深ヲサ遺跡があり同時期の水田跡が展開している。以下周辺部で調査された那珂深ヲサ遺跡、那珂君体遺跡の水田址についてその概要を述べる。

那珂深ヲサ遺跡

昭和53年、55年、56年に計3回の調査を実施している。1次調査では4条の溝と構造遺構が検出され、古墳時代前期から中世に至る水田に伴う水利遺構が認められるが、水田区画そのものの検出まで



- | | |
|-------------------|----------|
| 1. 那珂君休遺跡 | 5. 那珂遺跡群 |
| 2. 雀居遺跡 5次調査 | 6. 比恵遺跡群 |
| 3. 雀居遺跡 7・9～11次調査 | 7. 板付遺跡 |
| 4. 雀居遺跡 3・6・8次調査 | 8. 諸岡遺跡 |

Fig.1 周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)

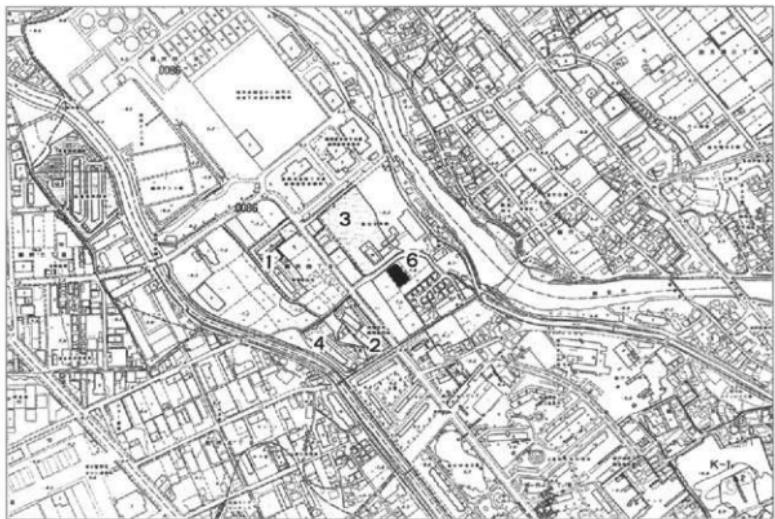


Fig.2 調査区位置図 (1 / 8,000)



Photo.1 2次調査



Photo.2 3次調査



Photo.3 4次調査



Photo.4 6次調査

には至っていないが水田経営が行われていたことは疑う余地もない。この地域は那珂郡家推定地に当たり「中寺」等の墨青土器も多く出土しており、近隣にその所在の可能性を秘めている。

那珂君休遺跡

昭和55年以来、学校、公営、民間の共同住宅等の建設に伴い7次の調査が実施されている。1次調査では8世紀後半の水路と柱穴の調査で、条里造構との比較がなされている。2次調査では中世と古墳時代の敷面にわたる水田跡が調査されV層では古墳時代前期の水田44枚を検出している。平面形は規格性に乏しく、旧地形に左右されたようで多角形ないし四角形を示す。その内部には水利施設は無く田越しの取、排水を行っている。3次調査（那珂久平遺跡）は今回調査地点の北東部に隣接する位置に当たり、一連の遺跡である。調査区の北東側には弥生時代後期の河川と川を横断する大規模なアーチ状の堰を設けている。弥生時代後期の水利施設ではあるが、水田区画の確認はできていない。河川の南側には古墳時代前期の水田区画が展開している。平面形は蜂の巣状の多角形を示し地形に依り多少変化している。3次調査と同様に出越しの取、排水を行っている。

遺跡名(次数)	調査番号	調査期間	調査面積	所在地	報告書名
那珂深ワサ(1)	7803	S.53.12.11 ~ S.54.5.3	3,130m ²	博多区 那珂深ワサ	「那珂深ワサⅠ」 福岡市教育委員会調査報告書第72集
那珂深ワサ(2)	8020	S.55.6.3 ~ S.56.1.21	5,000m ²	博多区 那珂深ワサ	「那珂深ワサⅡ」 福岡市教育委員会調査報告書第82集
那珂深ワサ(3)	8020	S.56.4.7 ~ S.56.6.30	2,000m ²	博多区 那珂深ワサ	「那珂深ワサⅢ」 福岡市教育委員会調査報告書第82集
那珂君休(1)	8047	S.55.8.25 ~ S.55.9.10	710m ²	博多区 那珂君休	「那珂深ワサⅣ」 福岡市教育委員会調査報告書第82集
那珂君休(2)	8226	S.57.9.13 ~ S.58.1.17	2,900m ²	博多区 那珂4丁目	「那珂君休Ⅴ」 福岡市教育委員会調査報告書第106集
那珂君休(3)	8336	S.58.5.27 ~ S.59.1.26	9,000m ²	博多区 那珂4丁目	「那珂君休Ⅵ」 福岡市教育委員会調査報告書第133、163集
那珂君休(4)	8601	S.61.5.22 ~ S.61.11.22	2,900m ²	博多区 那珂4丁目23社	「那珂君休Ⅶ」 福岡市教育委員会調査報告書第208集
那珂君休(5)	9557	H.7.2.27 ~ H.7.3.27	680m ²	博多区 那珂4丁目	「那珂君休Ⅷ」 福岡市教育委員会調査報告書第517集
那珂君休(6)	8226	S.57.9.13 ~ S.58.1.17	2,900m ²	博多区 那珂4丁目311	「那珂君休Ⅸ」 福岡市教育委員会調査報告書第502集
那珂君休(7)	9605	H.8.5.10 ~ 調査中	11,000m ²	博多区那珂4丁目	

那珂深ワサ・那珂君休遺跡調査一覧

II. 調査の記録

1. 調査の概要

試掘調査では上、下2面の水田が確認されていたが、上面の水田面は部分的に足跡が残るが、砂質土で覆われることもあり面的には把握することは出来なかった。出土遺物は無く時期は明確に出来なかったが那珂君体遺跡第7次調査ではこの面に相当する層から近世の水田が検出され、おそらくその時期に相当するものであろう。下層水田面は地表下1.45mの暗褐色土ないし黒褐色粘質土に塗かれ、南側から北側へ緩やかな傾斜を示し、自然地形に左右された状況を示す。部分的に粗砂に覆われ、その部分では畦畔を確認できたが、それ以外の所では不明瞭となる。水田跡は計14枚確認でき、各々削り出しの畦畔も残存していたが、調査面積が狭いために、水田跡全部を調査出来たのは1枚だけで、その全体の形態は不明瞭である。おおまかには水田の平面形は台形ないし長方形で、その広さは50m²前後であろう。水田跡を覆う砂層は北半分と南半分では異なり、北側が時間的に古く、南側が新しくなるが、時期的にはほぼ同一で近接したものであろう。また南端に検出した水田では2面の水田を確認できた。畦畔は古い畠の上に、それを補修するかのように新しい畦畔を築いている。

水田跡の洪水砂からはほとんど遺物は出土していないので明確な時期は与えられないが、周辺の調査状況から古墳時代前半頃の水田跡と考えられよう。



Photo.5 調査区遠景

2. 土層 (Fig.3)

今回調査した面は北東隅で1.42mの深さの暗褐色粘質土でその上を粗砂層に覆われていたが部分的には砂に覆われていない部分もあり、あまり良好な状況ではなかつた。土層は1層は灰褐色の耕作土、その下に黄褐色の水田土があり、所により厚、薄が見られる。3層は淡黃白色砂質土でシルトに近い砂を多く含んでいる。4層は淡黄褐色砂質土で粗砂を多く含む。7次調査の上層の水田面がこの層にあたり、3層がその上を覆う洪水砂になるものであろう。5層は黄～灰褐色土で南にいくに従い粘性が強くなる。6層は南側では上、下2層に分離できる。灰～暗褐色土で上層が灰褐色となる。7層はグライ化した土壤で青灰色粘質土で調査区の南東側の洪水砂が被っていない部分では黄褐色粘質土となる。暗灰色ないし青灰色シルト層で部分的に粘質土となる。9層は黄白色粗砂で砂が厚いところでは細、微砂層が織状の堆積を示し、洪水砂で一時的に埋まったものであろう。10層は北東部の低い部分に堆積した微砂層で淡灰色を呈する。11層は暗褐色粘質土で水田面となる。

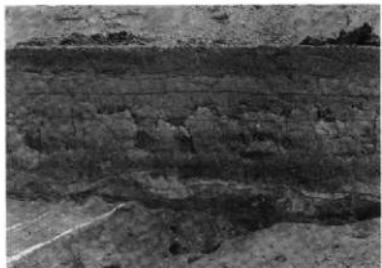


Photo.6 土層写真（南側）



Photo.7 土層写真（西側）



Photo.8 水田全景（北側）

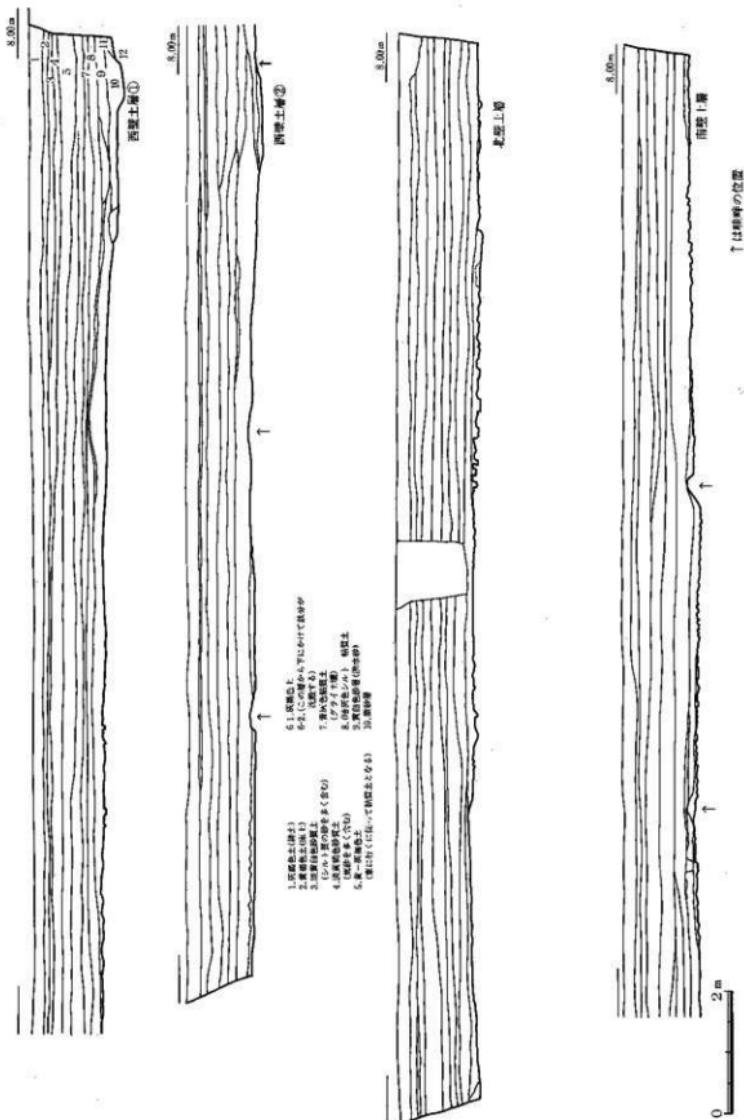


Fig.3 土層実測図 (1/80)

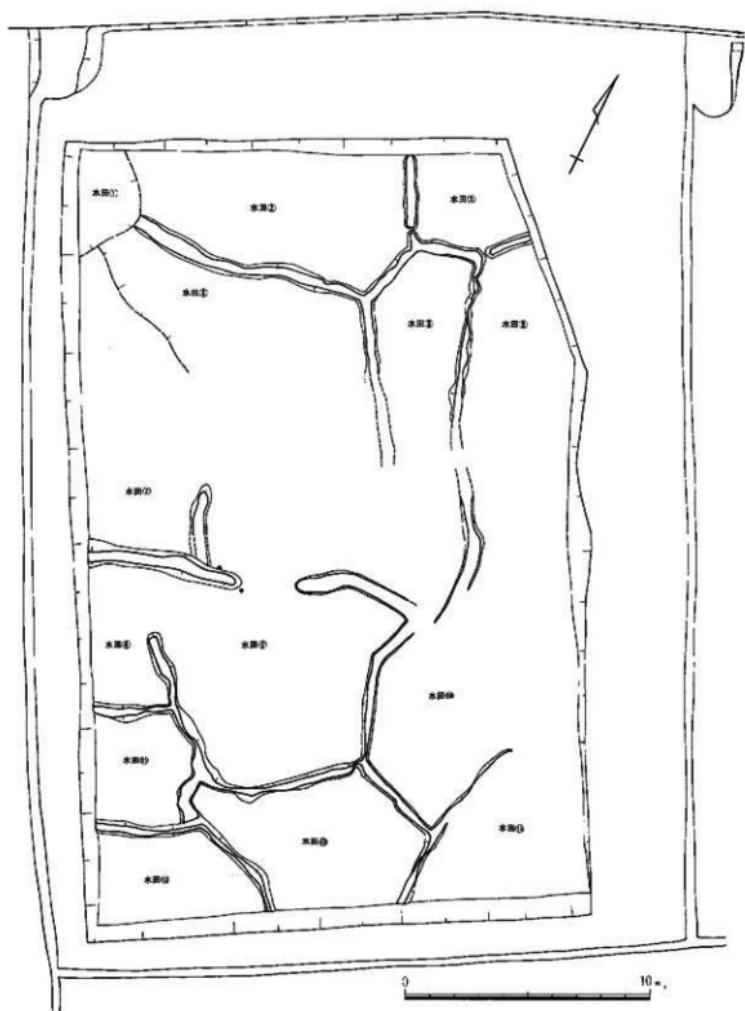


Fig.4 調査区全体図 (1 / 200)

3. 水田の調査 (Fig. 4)

今回の調査では計14枚の水田を検出することが出来た。洪水砂の堆積がなかったり、或いは洪水で流されたりして畦畔が途切れてしまったり、調査区が狭いこともあって調査区外へ拡がっていたりで一枚の水田跡の広さを確認できたのは水田⑨だけである。地山の傾斜は基本的に南東から北西方向に傾斜

を示すが、南端では水田12が最も高く、北、東へ低くなっている。現況で観察できる地形よりも複雑な地形をなし、その自然地形に左右された水出造成が行われていたことが窺える。畦畔の造形が良好な南、北側では平面は蜂の巣状の多角形、中央部では縦長の長方形に近い形態を示す。これまでの調査でも同様な状況である。畦畔はほとんどが地山削りだしであるが水田13等洪水などで欠損した箇所の補修に砂混じりの暗褐色土で築いている。水田は地表下1.05m～1.45mで検出し、その上を荒砂層で覆われ、厚い部分では約35cmを測る。水田5、6、10、14の東側ではほとんどこの荒砂の堆積ではなく、西側に向かって厚く堆積している。最も高い水田6の標高は6.80m、最も低い水田1は6.36mでその比高差は46cmである。

以下各水田についてその概要を記す。水田1はいずれにも畦畔を伴わないが、水田2よりも一段低くなることから一枚の水田とした。洪水等により畦畔が消失したものであろう。水田2は南～東側に幅60cm～80cmの畦畔をもち、水田3、5と接する。北側は調査区外へと拡がる。蜂の巣状の多角形となるものであろう。水田3との間に水口を設ける。水田2と3を覆う砂は間層（水田面）を挟んで上、下2層に分かれ。田面が洪水砂に覆われた後、その上に水田を作ったものであろう。ただ上面の水田に伴う畦畔は検出出来なく、2層に分離できるのも部分的であり、洪水による被害の補修と考えられよう。水田3は西、南側の畦畔のみで大部分は調査区外へ拡がる。南側は水田5、6の畦畔と接する所で内側へ屈曲し、平面形は多角形をなすものであろう。また水田6との境には水口を設けている。この水田には足跡がよく残っている。水田4、5、6は南北に延びる畦畔の一部が残るが南側は被覆する砂層が無く不明瞭となる。平面は長方形をなすと思われる。水田10との境には畦畔は認められないが水田6が標高6.66m、10が6.62mで約4cmの比高差があり、形状からも2枚の水田と考えた。水田8は南、北畦畔は完存するが東の畦畔は途中で途切れる。水田11との比高差は5cmである。水田9だけはほぼ全形が窺える。ほぼ五角形をなし各畦畔は緩やかに蛇行する。南側の畦畔は下面の畦畔が低くなつたその上に砂を含む粘土質を積み重ねている。平面の形態は上、下の水田とも同じで変化は無い。洪水により欠失した箇所のみを補修したもので時期的には同一と考えられよう。またこの水田の基盤

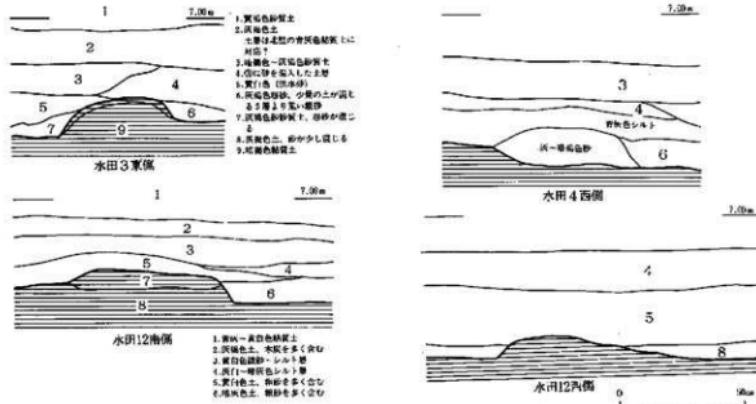


Fig.5 畦畔断面実測図 (1/10)



Photo.9 水田全景（南側）

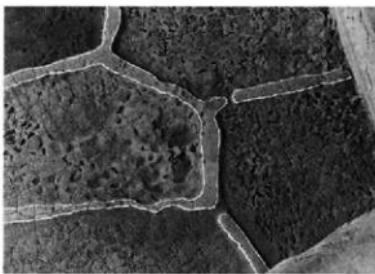


Photo.10 水田（北東隅）

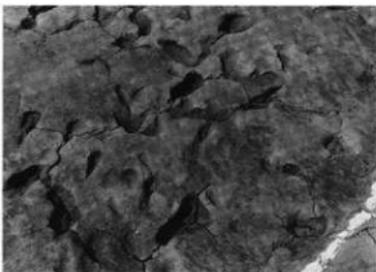


Photo.11 足跡



Photo.12 水口（水田3）



Photo.13 畦畔（水田3東側）



Photo.14 出土土器

層だけが層厚5~10cmほどの淡暗灰色のシルト質土の上に足跡が検出できることから、軽微な洪水で埋った田面を整地して水田としたものであろう。北側の中央部は幅約2mが水口状となり畠の端部に数本の丸木杭を打ち込んでいる。水田10は水田6とを区切る畦畔は無いが水田面の比高差から2枚と考えられる。南東部分の畦畔は遺存状態が悪く水田10とは数センチ、水田14の田面と同一高であるが畠の部分だけ足跡が無く畠であると判断した。水田11も蜂の巣状の多角形をなすと思われるが、西側は調査区外へ拡がり詳細は不明である。12は調査区内では最も高い水田標高6.80mを測る。足跡も良好に残るが大半は調査区外へ延びるため全体の形状は不明である。水田13は北西隅が突出する変形した平面形となる。この水田を中心として洪水砂を挟んで水田面が2面となる部分が拡がる。その範囲



Fig.6 出土遺物実測図 (1/3)

は水田13の西側から水田9、10の南側にかけての小範囲である。砂の厚さは数センチでかなり薄い。畔は下面の低くなった上に土盛して補修を行い、水田の平面形に変化は無い。水田14の西側には多くの足跡が残るが東側では徐々に砂が薄くなり足跡も無くなり、南壁の土層により水田面が確認できるだけで区画は明らかではない。

4. 出土遺物 (Fig. 6)

水田跡から出土した土器は網片で実測できるものはない。図示したのは水田が埋没した洪水砂より上層の茶褐色～暗褐色土から出土したもので、水田の時期を示すものではない。

1は十郎器の高杯の脚一部部にかけての破片である。胎土には少量の砂粒を含むが精良で、焼成も良く、外側には丹塗研磨を施す。3～5は底部糸切りの上部器の皿である。摩耗が著しく調整は不明。淡肌色を示す。2、6は長土出土である。2は焼き締め陶器で壺の肩部の破片である。外側には平行の叩き痕が残る。表面は淡茶褐色、断面は灰褐色を呈する。6は龍泉窯系青磁の簞蓮弁文碗の破片である。外側には彫りの浅い蓮弁の端部が僅かにのぞく。釉は黄味を帯びた緑灰色、胎土は灰白色で精良である。7は李朝青磁の底部である。胎土は精良であるが微砂粒を含む。高台は小さく、外側は垂直に、内側は斜めに浅く削り込む。壺付きに目跡が残る。釉は緑灰色で外側全体に施釉するが、内面の坯部は無施釉である。

III. おわりに

今回の調査は申請面積の内、工事により破壊される760 m²の狭い範囲である。そのため一枚の水田の面積を求められたのは一枚だけ、外は調査区外へと括り不明な部分が多かった。水田は暗褐色から黒褐色の粘質土を基盤層とし、畔は地山削り出しで、洪水により消失した部分の補修を砂混じりの粘質土で行っている。水田の形態は基本的には蜂の巣状の多角形を示すが自然地形に左右されるため変形した長方形を示す部分もある。水田は検出した面の一面であるが部分的には洪水により埋没した田面のかさ上げを行っている。土層の観察だけでは2面の水田と思えるが、全体的ではなく1面の水田として捉えられよう。水田の時期は前述の通り極めて少なく、水田を覆う洪水砂からは時期を決定する資料に恵まれ無いが、周辺の水田跡の調査を参考にすると古墳時代と考えられよう。

福岡市埋蔵文化財調査報告書517集

那珂君休VI

発行 福岡市教育委員会
(福岡市中央区天神1-8-1)

1997年3月31日 発行

印刷 桑文社 印刷